

映画館

田
淵
靖
章

人物

田中博之	ケンタロウ	悪太郎	悪次郎	少女	殿森茂雄	伊田敦	野中孝彦	メガネ	森川大輔	石飛浩	檜崎達哉	田中静江	浮浪者	会社員	博士	桃太郎
(14)	(36)	(33)	(24)	(9)	(21)	(21)	(20)	(25)	(13)	(13)	(12)	(62)	(55)	(42)	(88)	(45)
観客の中学生	主人公	暴走族のリーダー	悪太郎の弟	ケンタロウの仲間	観客の大学生	観客の大学生	観客の大学生	観客の無職	観客の中学生	観客の中学生	観客の中学生	博之のお婆さん	観客の不良者	観客の会社員	博士	博士の息子

○田中家2階・博之の部屋(朝)

田中博之(17)、ベッドの上で目を覚ます。

起き上がると走って部屋から出て行く。

○田中家1階・リビング(朝)

博之、ふすまを開けて入って来る。

博之「おばあちゃん!」

座っている田中静江(63)、振り向く。

静江「どうしたん?」

博之「今日やで今日!デッドタウン救世主物

語!上映日やで!」

静江「そうやったね。で、何時からやった?」

博之「2時からやっちゅ!おばあちゃん覚え

てるやろ!」

静江、満面の笑みを見せる。

静江「おーおー、覚えてるよ」

博之「うおー」

と、嬉しそうな表情を浮かべる。

○電車の中(朝)

森川大輔(13)、石飛浩(13)、並んで座っている。

石飛「あー、映画楽しみだねー」

森川「崩壊した社会が舞台で、主人公の乗ってる改造車もすごいからな」

石飛「めっちゃくちゃオモシロそうだね！」

と、森川と嬉しそうな表情を浮かべる。

○御殿山駅(朝)

博之、静江、ホームに立っている。

電車到着のアナウンスが流れる。

電車が到着して、扉が開く。

○電車の中(朝)

博之、静江、扉から入って来て座る。

正面に森川、石飛、榎崎達哉(12)、並んで座っている。

森川「登場人物全員が謎に包まれてるん？」
榎崎「なんかね、最初は味方だった人とか、

いい人達が突然豹変して敵になったりするらしいよ」

石飛「それ怖いね」

檜崎「だから誰も信用できないよ」

森川「まあ大丈夫や。主人公のケンタロウが全部倒すだけや。あのショットガンで」

博之、3人を見てうれしそうな表情を浮かべて、静江を見上げる。

博之「おばあちゃん！あの人達もな、映画見に行く見たいやで！」

静江「そんな感じの事言うてたな」

博之「うおー。もしかしてな、この電車に乗ってる人達な、みんな同じやったりしてな」

静江「それやったら面白いな」

博之「運転手さんもその為に運転してるかも知れへんな」

静江「運転手さんは仕事中で難しそうやで」
博之「うおー、運転手さん可愛そうやな」

と、悲しそうな表情を浮かべてから、笑顔で窓の外を見る。

○ワンルームの部屋の中

殿森茂雄(21)、伊田敦(21)、野中孝彦
(20)、机を囲んで座っている。

殿森「もう一回言ってくれ？」

野中「デッドタウン救世主物語」

殿森、ニヤつく。

殿森「何やんねんその子供向けっぽいタイトルは？」

野中「今日から上映らしいで！」

殿森、野中を止めるように片方の手の平を向ける。

殿森「待てよ、お前、まさかそれを見たいとか言い出さんやろうな？」

野中「ちよっと見たいかも」

殿森、手を下げて伊田を見る。

殿森「どう思うその企画？」

伊田「たまには映画もいいんじゃない？」

殿森、野中を見て真剣な表情を見せる。

殿森「それ、どんな内容やねん？」

野中「暴力が支配する謎の荒れ果てた時代を

生き抜く物語らしいで」

殿森「それマッドマックスとか北斗の拳のパクリちやうんか？」

野中「いや、善人である普通の人々が突然豹変して襲いかかってきたりするサスペンスやから大人の作品やで」

殿森「それどこの国の映画やねん？」

野中「日本映画」

殿森、野中を見たまま呆然とする。

伊田、その沈黙を笑う。

殿森「俺には駄作しか思い浮かばへんわ」

伊田「逆に面白そうな感じもするけどね」

野中、満面の笑みを浮かべる。

野中「そうやろ。逆にいいやろ！」

殿森、ニヤニヤしながら悩む。

○中規模な街の繁華街

博之、静江、歩いてる。

静江「おー、やっと映画館見えてきたでー」

博之「うおー」

その先には、丈夫そうな黒いドーム型の建築物が立っている。看板には『ザ・シエルター』と書かれている。

○映画館・チケット売り場

デッドタウン救世主物語のポスターには、小太りで小柄なケンタロウが、タレ目のサングラスをかけて直立している。

殿森、受付にやって来る。

殿森「デッドタウン救世主物語を大人3枚」

お金を払い。チケットを受け取る。

その場から離れて行く。

○映画館・出入口の外

殿森、伊田、野中、扉から出てくる。

博之、静江、入れ替わるように、映画館の中に入って行く。

メガネ(25)、少しすると、扉から出て来て立ち止り、カバンの中からスマー

トフォンを取り出し時間を見る。同時に、チケットがカバンの中から地面に落ちる。

メガネ、その場から離れて行く。

浮浪者(55)、やって来て落ちているチケットを拾う。

浮浪者「いいモン見つけ！ははっ！」

と、映画館の中に入って行く。

○映画館・売店

ガラス張りの棚には、タレ目のサングラス、水筒、特殊警棒、縄など、映画関連の道具が並んでいる。

博之、サングラスをじっと見ている。

静江、博之を見て笑みを浮かべる。

静江「これほしいんか？」

博之「うおー……」

静江「いいよー。買ってあげるよ」

博之、驚いた様に静江を見上げる。

博之「いいの!!」

静江、嬉しそうに頷く。

○ファーストフード店・店内

殿森、伊田、野中、座っている。

野中「何だかんだ言ってやっぱり来たな」

殿森「俺は期待してないぞ」

野中「案外面白いって」

殿森「ハリウッドでもその系の映画はもういいわって感じやのに、日本映画で荒れ果てた時代を描くってどんなやねん」

伊田「最近の日本映画のCGは結構綺麗だよ」

殿森「一歩引いてCGが綺麗やったとしよう。

それで何を描くねん？人物の感情とか葛

藤とか、そんなんいらんで」

野中「多分アクションやって。ショットガン使うらしいから」

殿森「日本映画とショットガンの組み合わせなんて、確実に駄作やる？」

伊田、野中、笑う。

殿森「なんか嫌な予感するわー」

伊田「逆にネタになるかもね」

殿森「銃を撃ってるのに反動がないとかな」

伊田「カーアクションが法定速度とか？」

殿森「それを期待するわ。さすがにこの歳になつて単純なアクションでは喜ばれへんからな。それも日本映画って」

野中、笑みを浮かべる。

野中「楽しみやな。デッドタウン救世主物語」

殿森「そのタイトルで笑けるわ」

と、笑って顔をそらす。

○劇場

博之、静江と並んで前方の席に座っている。

客、続々と入って来る。

殿森、伊田、野中、入って来ると、中央より少し後ろの席に座る。

浮浪者、一番後ろの席で、酒を飲んでいる。

森川、石飛、檜崎、その順番で、前か

ら3列目の席に並んで座る。

○映画館・劇場の入り口

列に並ぶ客達、従業員にチケットを渡して、次から次へと通り抜けて行く。

メガネ、続いてやって来て、カバンの中に手を入れる

メガネ男「あれっ……」

と、カバンの中を探す。

客が詰まる。

メガネ、急いでその場を去る。

○映画館・チケット売り場

メガネ、小走りで受付にやって来る。

メガネ「あのー、デッドタウン救世主物語のチケットを落としてしまったんですが」

受付の声「申し訳ございません。落とされた

チケットの保障は承っておりません」

メガネ「なら大人一枚ください」

受付の声「申し訳ないんですが、もう売切れ

てしまいました」

メガネ「じゃあ、次の時間のデッドタウン救世主物語のチケットをください」

受付「本日1回限りの上映となっております」

メガネ、肩を落として去って行く。

○劇場

博之、ケースに入っているサングラスを見ている。

静江、隣に座っている。

静江「かけへんのか？それ？」

博之「これはな、大人になったらかけるねん」

静江「そうかー。おばあちゃん楽しみにしてるで。その日がくるのを」

博之「うおー」

と、嬉しそうな表情をする。

静江、カバンの中から菓子箱を取り出し、博之に渡す。

会社員(37)、やって来ると、静江の隣に座る。

劇場は満席になる。

座っている殿森、伊田、野中。

野中「満席やな」

殿森「そこまで人を惹きつける魅力があんの

かこの映画には？」

伊田「どっちにしてもネタにはなるよ」

殿森「そうあってほしいわ。ちよつと飲み物

買ってくるわ」

伊田「あつ、じゃあ俺も」

と、殿森と外に出て行く。

○映画館・売店

殿森、伊田、メニューを見上げている。

殿森「できる限り大きい物が必要やな」

伊田「大きいなの？」

殿森「さすがにこの映画を何も飲まず食わず

で見続けるのキツそうやからな」

伊田「確かに」

殿森、伊田、カウンターの前に行く。

○劇場

薄暗くなり、コマーシャルが流れている。

殿森、伊田、3人分の飲み物を手に、野中の席の隣に戻って来て座る。

コマーシャルが終わると、幕が広がり、劇場が更に暗くなる。

博之、希望に満ち溢れた表情になる。

博之「うおー、ついに来たぞ！うおー」

と、両手で握り拳を作り身構える。

○画面・廃墟となった街の道路

薄暗く人がいない。

ボロボロの軽自動車、走っている。

○画面・軽自動車の車内

小柄で小太りな体型をしているケンタロウ(36)、タレ目のサングラスをかけ、ハンドルを握っている。

ケンタロウ「ん？」

と、眉を顰める

○画面・ガソリンスタンド

老人、横たわっている。

少女(6)、横に座っている。

軽自動車、目の前に止まる。

ケンタロウ、車から降りる。

ケンタロウ「大丈夫か？」

老人「お願いです。この子を安全な場所に連れて行ってください」

ケンタロウ「もちろんだとも」

老人「さあお嬢ちゃん、この人について行くんだ。いいね」

少女、大きく頷く。

ケンタロウ、老人に手を差し出す。

ケンタロウ「さあ、あんたも立つんだ」

老人「私は足手まといになるだけです。他の場所を探すので、放っておいてください」

ケンタロウ「大丈夫。この車には4人乗れる」

その時、無数のバイクの音が近づいて

来る。

老人「早くその子とここを」

ケンタロウ「あんたを見捨てる事はできない」

と、老人に肩を貸し、老人と少女をスタンド内の店の中に入れる。外から扉を閉め、音のする方を向く。

悪太郎(33)、悪次郎(24)、2台のバイクでやって来ると、軽自動車の前に止まる。

悪太郎「こりやいい車じゃねえか」

と、バイクを降りて軽自動車に触れる。

悪次郎「兄貴！どうする？」

悪太郎「この車は俺の物だ」

悪次郎、ケンタロウを睨みつける。

悪次郎「おい、鍵を出せ」

ケンタロウ「悪いが、その車はやれん」

悪次郎「なんだと！」

と、険しい表情を浮かべて、ケンタロウに掴みかかろうとする。

ケンタロウ、ズボンの中からショット

ガンを取り出し、悪次郎に向ける。

悪次郎、驚いて止まる。

ケンタロウ「お前はもう死ぬぞ。3秒後に」

○劇場

殿森、少し笑う。

殿森「これ北斗の拳やんけ！」

○画面・ガソリンスタンド

ケンタロウ、ショットガンを向けている。

その先の悪次郎、悔しそうにバイクに乗って、悪太郎と走り去る。

ケンタロウ「もう出て来ても大丈夫だ」

少しすると、老人、怒った表情で扉を開けて出て来る。

老人「貴様！八つ裂きにしてくれるわ！」

と、ケンタロウに向かって走る。

○劇場

博之、驚く。

博之「おっ、何や!!」

○画面・ガソリンスタンド

ケンタロウ、老人を取り押さえている。

ケンタロウ「一体どうしたんだ？」

老人「離せ！お前を殺してやる！皆殺しだ！」

ケンタロウ、ショットガンを取り出し、

老人の頭を叩いて気絶させる。

○劇場

殿森、足を組み、アゴに手を当てる。

殿森「そう来たか。始まった所からいい感じ

に引き付けるやんけ」

劇場に軽自動車の扉の閉まる音が響

き、走り出す音が響く。

会社員、時間を確認するように腕時計

を見てから、画面を見る。

○画面・寂れたホームセンターの駐車場

軽自動車、やって来ると停車する。

ケンタロウの声「ここで待っていてくれ」

ケンタロウ、軽自動車から降りて、店の中に入って行く。

○画面・寂れたホームセンター店内

薄暗く、物が散乱している。

ケンタロウ、落ちているゴミを踏みつけ、音を立て歩く。

その先の死角に隠れている男A、ナイフを片手にかまえて待っている。

○劇場

博之、驚く。

博之「危ない！ナイフが前におる！」

○画面・廃れたホームセンター店内

ケンタロウ、立ち止まると、ショットガンを取り出してかまえる。警戒する
ように、忍び足で男Aが隠れている死

角に足を踏み入れる。

男A、死んだフリをしている。

ケンタロウ、一息つき、男Aに背を向ける。

男A、勢い良く目を開けてケンタロウを睨む。

博之の声「後ろや危ない！」

ケンタロウ、急いで男Aの方へと振り返りショットガンを向ける。

○劇場

殿森、伊田、声を出さず笑っている。

殿森「あの子ども登場人物の1人みたいやな」

伊田、笑いながら小刻みにうなづく。

○画面・廃れたホームセンター店内

ケンタロウ、ショットガンを死んだフリをしている男Aに向けている。

博之の声「死んだフリしてるだけやっちゅ！」

男A、突然、ケンタロウに襲いかかる。

ケンタロウ、ショットガンで男を叩いて気絶させる。

○劇場

博之、真剣な表情で画面を見ている。
森川、前の席から怒った表情で振り返るように博之を睨んでいる。

○画面・廃れたホームセンター店内

ケンタロウ、周囲を警戒するようにショットガンを片手にやって来る。
棚からバイク用のエンジンオイルを手に取り、服の中に入れる。
男B、死角からナイフを片手に、ケンタロウの右側から近づいて来る。

○劇場

博之、立ち上がる。

博之「危ない左や！」

森川、勢い良く怒った顔で振り返って

田中を睨む。

○画面・廃れたホームセンター店内

ケンタロウ、男Bに背を向け、誰もいない方向にショットガンを向ける。

男B、ケンタロウの背後からカナ이프を片手に襲いかかる。

博之の声「間違えてもうた右や右！」

ケンタロウ、素早く振り返り、ショットガンで男Bを叩き、気絶させる。

○劇場

殿森、眉を顰めて、真剣な表情で画面を見ている。

大きな画面に映し出されている後姿のケンタロウ、画面の方へ振り向いて、カメラ目線になる。

ケンタロウ「助かったよ」

と、背を向け離れて行く。

博之、目を輝かせて嬉しそうにする。

殿森、座っている椅子と、その周囲を
入念に調べる。

隣に座っている伊田、殿森を見る。

伊田「何してんの？」

殿森、伊田を見て止まる。

殿森「どこかに音声認識システムのマイクが
埋め込まれてるはずや」

と、視線をスクリーンの周囲に移す。

殿森「それとも、高性能なマイクで遠くから
客席の音を拾ってるんか？」

伊田「もしかして、連動してる？」

殿森「間違いない。これは音声認識システム
を使った、新型のエンターテイメントや」

と、考える表情になる。

殿森「でも、どこにそれが……」

伊田「もしかして、エキストラの人とかじゃ
ない？」

殿森「台本……、という事はあれは子役か？」

と、伊田と博之の方を見る。

博之、真剣な表情で画面を見ている。

○画面・廃れたホームセンターの駐車場

ケンタロウ、扉から出て来る。

博之の声「いやー、さっきは危なかったなー」

ケンタロウ「ああ、君が教えてくれなければ、

俺はやられていた」

と、軽自動車の方に歩いて行く。

○劇場

殿森、伊田、呆然と画面を見ている。

伊田「これ参加しろって意味じゃない？」

殿森「ちよつと試してみるか」

と、構える様に前のめりになる。

○画面・ホームセンターの駐車場

ケンタロウ、軽自動車に近づいて来る。

車の中に少女の姿が見えない。物音が

する。ケンタロウ、ショットガンを取

り出し、周囲を警戒する。

○劇場

殿森、口から息を吸い込む。

殿森「(大きな声)右だ！」

○画面・ホームセンターの駐車場

ケンタロウ、急いで右を向く。誰もいない。

男C、左から現れ、ナイフでケンタロウの腕を刺す。

ケンタロウ「うあっ」

と、ショットガンを地面に落とし、バランスを崩す。

博之の声「えらいこっちゃ！」

男C、ケンタロウに襲いかかる。

ケンタロウ、男Cを蹴り飛ばし、ショットガンを拾い、男Cを叩いて気絶させせる。

○劇場

浮浪者、立ち上がって殿森の方を見る。

浮浪者「てめえ！ふざけて嘘ついてんじゃね

えぞ！」

殿森、驚くように浮浪者の方を見る。

○画面・ホームセンターの駐車場

ケンタロウ、画面の方を見て、画面に
右手のひらを見せる。

ケンタロウ「仲間割れはよせ！」

○劇場

立っている浮浪者、片手を後頭部に当
てて、画面を見ながら頭を下げる。

浮浪者「悪り悪り」

浮浪者を見ている殿森、声を出さずに
笑いながら伊田の方を向く。

殿森「やっぱり音声認識ソフト使ってるわ」

伊田「多分、今の人も関係者だよな」

殿森「あの服装にあの演技はそうやろう。そ
れにしてもアトラクション形式の映画な
んて始めてやわ」

と、嬉しそうな表情で画面を見る。

○画面・軽自動車の中

少女、助手席を倒して眠っている。
窓から、少女を探すように離れて行く
ケンタロウの姿が見える。

○劇場

博之、持っているお菓子を食べ始める。

○画面・軽自動車の中

少女、目を覚まして起き上がる。窓の
外を見る。

男D、窓の外に立って中を覗いている。

博之の声「えらいこっちゃ！」

○画面・廃れたホームセンターの駐車場

男D、軽自動車のドアを開けようとす
るが、鍵がかかかっていて開かない。
ズボンから棒を取り出し、ドアを叩き
だす。

○劇場

殿森、笑いだす。

殿森「なんでドアやねん。普通窓やろ」

伊田、それを聞いて笑い出す。

○画面・ホームセンターの裏

ケンタロウ、少女を探す様に歩いて来る。

○劇場

浮浪者、席から立ち上がる。

浮浪者「車の所に戻れ！」

画面に映っているケンタロウ、カメラ目線になる。

浮浪者「おねえちゃん車ん中に乗ってんだよ

！そこに怪しいヤツがいる！」

ケンタロウ「何だって！」

と、走って引き返す。

○画面・廃れたホームセンターの駐車場

男D、助手席のドアを叩いている。

ケンタロウ、男Dの肩に手を乗せる。

男D、振り返ると、ショットガンで叩かれ地面に倒れる。

ケンタロウ、鍵を開けて、助手席の扉を開ける。

ケンタロウ「大丈夫か？」

少女、頷く。

○ 廃れた街の道路

軽自動車、走って来ると、そのまま走り去って行く。

○ 画面・軽自動車の車内

運転してるケンタロウ、胸からバイク用のエンジンオイルを取り出す。
キャップを回して、一杯飲む。

○ 劇場

殿森、少し笑う。

殿森「どういう設定やねん。そらアカンやろ」

○画面・廃れた街の小さなバーの前

軽自動車、停車する。

ケンタロウ、少女、車を降りて、店の中に入って行く。

○画面・廃れたバーの店内

中に人はいない。ケンタロウ、少女、入って来る。

○画面・バーの厨房

ケンタロウ、入って来ると立ち止まる。

店員(42)、散弾銃をかまえて待っている。

店員「何者だ」

ケンタロウ「安全な場所を探している」

店員「嘘つくんじやねえ。なんでそんな物騒な物持ってたんだ！」

少女、ケンタロウの背後からやって来

て、店員を見る。

店員、少女を見る。

店員「どうやら、本当みたいだな」

と、散弾銃を下ろす。

○画面・廃れたバーの店内

店員、カウンターに立って、外のケン
タロウと向き合っている。

店員「ここもそう長くはいられない。奴らが迫
ってる」

ケンタロウ「バイクの連中か」

店員「それと、もっと薄気味の悪い連中だ」

○劇場

博之、お菓子を握った手が、口の前で
止まっている。

博之「もっと薄気味の悪い連中ってなんや？」

殿森、嬉しそうな表情を浮かべる。

殿森「また音声認識システムくるぞ」

店員の声「突然豹変する連中だ」

博之「あー、さっきのか」

店員の声「そうだ。あんたも見ただろ？」

博之「うおー、見た見た」

と、2度頷く。

○画面・廃れたバーの店内

店員、カウンターに立って、ケンタロウと向き合っている。

店員「ある日、突然強い衝撃と共に目が覚めると、地上は廃墟のようになっていた」

博之の声「うおー、それでどうなったんや？」

店員「普段見た事のない風貌をした暴走族が現れだした。それ以外の一般人は突然人食いみてえに豹変しだすようになった」

博之の声「えらいこっちゃ……」

殿森、伊田のクスクス笑う声がする。

店員「ああ、大事だ」

ケンタロウ「その理由を突き止めなければ」

店員「そんな悠長な事を言ってられないぜ。

俺もあんたもいつ豹変するか解らない」

ケンタロウ「なんだって？　どういう事だ？」

店員「俺にも解らねえ。だからあんたはその子供を安全な場所に送る事が重要だろ」

と、テーブルの下から地図を取り出して広げる。

店員「ここを見てくれ」

と、地図の一部に指をさす。

店員「豹変しない人々が暮らす安全な場所があるかもしれない」

ケンタロウ、その地図を見る。

○画面・荒野

悪太郎、悪次郎、暴走族達、円を囲んでいる。

その中央に、中年男性の惨殺された死体が置かれている。

博之の声「(大声)えらいこつちや！」

悪太郎「ん？」

と、仲間と共に声に反応する。

○劇場

殿森、伊田、今にも笑いだしそうな表情で画面を見ている。

博之、口を開けて、怯えた表情で画面を見ている。

静江、その隣で眠っている。

その隣の会社員、腕時計を見る。

○画面・廃れたバーの店内

店員、カウンターの上に地図を広げ指を指している。

ケンタロウ、それを見ている。

店員「この場所が現在地だ。目的地周辺への道は2つある」

店員、曲がりくねった峠道を指さす。

店員「この道を使えば誰もいないだろう。だが、周囲にガソリンはない。道が細いから、何かあれば終わりだ」

と、太い道路を指さす。

店員「この道は何でもある。何でもあるから、

連中もウヨウヨしている。どうする？」

ケンタロウ、太い道を指さす。

店員「大丈夫か？」

ケンタロウ、店員にショットガンを見せる。

店員、笑みを浮かべる。

店員「そうか。だが、今のあんたの車じゃ無理だ。たどり着く前に止まっちまうだろ」

と、店の奥に行く。そこから、鍵を取って来て、ケンタロウに投げる。

ケンタロウ、受け取る。

店員「外の倉庫に最高のマシンがある。あんたにやるよ」

と、不敵な笑みを浮かべる。

○劇場

森川、嬉しそうな笑みを浮かべる

森川「面白くなってきたで。ついに来るでー」

博之、立ち上がって劇場の外に出て行く。

会社員、腕時計を見る。

○画面・車庫の中

4WDと大きく表示されている。
博之の小走りをする影が横切る。
ケンタロウ、少女、白い軽トラックの
前に来る。

○劇場

森川、困った表情を浮かべる。

森川「なっ、なんやねんこれ？」

○画面・車庫の中

ケンタロウ、軽トラックの運転席を覗
き込む

ケンタロウ「4WDプラスマニユアルミッシ
ョン。まさか、こんな車に乗れるとは」

○劇場

森川、不満そうに顔を横に振る。

森川「何が4WDプラスマニュアルミッションやねん」

○画面・倉庫の中

ケンタロウ、少女、車を見ている。

暴走族達のバイクの音が聞こえてくる。

少女「この音は？」

ケンタロウ「奴らだ。さあ、早く車に乗るんだ」

ケンタロウ、軽トラックの扉を開け少女を助手席に乗せる。

車庫の扉を開ける。

そこから、店員、ビールの瓶を持って、ケンタロウに殴りかかってくる。

ケンタロウ、避けて店員を取り押さえる。

ケンタロウ「落ち着け、俺だ」

店員、逃れようと暴れる。

○劇場

博之、劇場に入ってきて来る。

ケンタロウの声「一体どうしたんだ？」

店員の声「離せ！この裏切り者め！殺せ、皆殺しにしろ！八つ裂きにしろー！」

博之、席に座って画面を見上げると、驚いた表情をする。

○画面・車庫の中

ケンタロウに取り押さえられている店員、逃れると、石を拾って持ち上げる。

店員「死ね！」

と、石を投げつける。

ケンタロウ、避ける。

店員、落ちているスパナを拾って、ケンタロウに殴りかかる。

ケンタロウ、ショットガンを取り出し、店員を叩いて気絶させる。

○画面・軽トラックの車内

少女、助手席からその光景を見ている。

博之の声「一体何が起こったんや!？」

少女「あの人突然襲ってきたの」

博之の声「ウソ! 何でや!」

少女「わからない」

○画面・車庫の中

ケンタロウ、店員を担いで軽トラックの荷台に乗せる。

博之の声「何か解った?」

ケンタロウ「解らない。だが、彼に何かが起こっているのは確かだ」

博之の声「うおー、怖いなー」

殿森の吹き出すような笑い声が響く。

○劇場

博之、半開きに口を開け、画面に集中している。

殿森、感心するように顔を横に振る。

殿森「臨場感あるし、革新的やわ音声認識システム。これ流行るで」

と、嬉しそうに隣の伊田を見る。

伊田「映画の世界と距離が近く感じるよね」
殿森「まさにそれやな。あの子も演技うまいわ。さすが子役やな」

と、伊田と納得するように頷き合う。

○画面・廃れたバーの外

軽トラック、近くの車庫の中から出て来ると、走り去って行く。

少しすると、暴走族達、その場に集まってくる。一番後ろから、ボロボロの軽トラックがやって来る。荷台に死体が3体乗っている。

○劇場

博之、驚いて飛び上がる。

博之「えらいこっちゃっ！」

森川、怒った表情で振り返り、博之を睨む。

○画面・廃れたバーの外

悪次郎、眉間にシワを寄せる。

悪次郎「兄貴、聞こえたか？」

悪太郎、聞き耳を立てている。

悪太郎「ああ聞こえたぜ」

と、犬のように周囲の匂いを嗅ぎだす。
暴走族達、同じように匂いを嗅ぎだす。

○劇場

博之、慌てて両手で口を押さえる。

膝の上のお菓子が床に落ち、音が響く。

悪次郎の声「また音がしたぜ！」

静江、目を覚まして博之を見て、地面
を見る。

静江「あら、落ちてるよ」

と、お菓子を拾おうとする。

博之「あかんっちゅ！」

静江「みんな映画見てはるから」

と、人差し指を自分の口に当てる。

静江「しーよ。しー。な。しー」

○画面・廃れたバーの外

悪太郎、笑みを浮かべている。

悪太郎「ガキとババアがこの辺りにいるぞ！」

暴走族達、悪次郎、歓声を上げ、体を大きく動かしてはしゃぎだす。

○劇場

殿森、嬉しそうに手を顎に当てる。

殿森「そうくるかー」

悪太郎の声「おい、今度は男の声がしたぞ」

殿森、伊田を見て自分を指差す。

伊田、嬉しそうにうなづく。

伊田「多分」

悪太郎の声「もう一人いるぞ！」

殿森、笑って伊田に指を差す。

博之、歯をかみ締め、怯えるように画面を見ている。

○画面・廃れたバーの外

悪次郎、扉の前に立つ。

悪次郎「兄貴、この中だぜ」

静江の声「トイレ行くか？」

博之の声「もう行ったつちゅ。静かにしな見つかってまうつちゅっ！」

静江の声「そうかそうかー」

悪次郎、扉を蹴破って中に入る。

悪太郎、暴走族達、それに続く。

○画面・廃れたバーの中

悪太郎、悪次郎、暴走族達、呆然としている。

悪太郎「どうなってんだ？誰もいねえ……」

と、周囲を見渡していると、カメラ視線になる。

悪太郎「うん？何だこの丸いのは……」

と、画面を握るように手を出す。

画面が握られるように暗くなる。

○画面・軽トラックの車内

ケンタロウ、運転している。

少女、助手席に座っている。

○劇場

会社員、腕時計を見てから、席を立ち、劇場から出て行く。

○映画館の出入口・内側

会社員、扉の元に歩いて来る。扉を開け外を見ると呆然と立ち止まる。

○映画館の外

周囲に建物が無い。人がいない。そこに黒いドームの形をした映画館だけがある。

会社員、開いた映画館の扉から外に出て来る。周囲を見渡しながら少し歩いて、映画館の方を振り返る。

会社員「何てことだ……」

会社員の目の前を、丸く小さい物体が飛んでいる。会社員、それを見ると、

怯えるよう映画館の中に逃げ込む。

○映画館の出入口・内側

会社員、入って来ると扉と鍵を閉める。
そのまま、トイレの方に走って行く。

○映画館のトイレ

会社員、息を切らせながら入って来る。
慌てる様に蛇口をひねり、顔を激しく
洗って鏡を見る。

会社員「どうなっているんだ」

と、両手を洗面台について、考え込む。

○画面・映画館の前

軽トラック、出入口の前を低速で通過
して、少し先で停車する。ケンタロウ、
軽トラックから降りて、周囲を見渡す。

○劇場

浮浪者、画面に映る映画館とケンタロ

ウを見ながら、酒を一杯飲む。

○画面・映画館の横

メガネ、壁にもたれて座っている。

ケンタロウ、足音と共にやって来る。

メガネ、立ち上がる。

メガネ「あつ、あなたは？」

ケンタロウ「安全な場所を探している」

メガネ「安全な場所？一体、何が起こってるんですか？」

ケンタロウ「何も覚えていないのか？」

メガネ「覚えるも何も、外に出たら街がこんな状態になってて……。つい一時間前まで

街は普通だったのに……」

ケンタロウ「この街は一時間前まで存在していたのか？」

メガネ「存在って……いつも通りでしたけど」
ケンタロウ「まだ地上に崩壊していない場所

が残っていたとは」

メガネ「崩壊って、周辺の街はどうなっている

んですか？」

ケンタロウ「数年前からこの状態だ」

メガネ「数年前から……」

と、呆然とする。

○画面・軽トラックの車内

ケンタロウ、運転している。

助手席で少女を膝の上に乗せている

メガネ。

メガネ「信じられない。街がこんな姿に……」

ケンタロウ「少しガソリンスタンドに寄るぞ。

早くしないと奴らが来る」

メガネ「奴ら？」

ケンタロウ「人間の皮を被った悪魔達だ」

と、険しい表情を浮かべる。

○画面・ガソリンスタンド

軽トラック、道路の方から入って来て、

停車する。

○画面・軽トラツクの車内

ケンタロウ、エンジンを切る。助手席で少女を膝の上に乗せているメガネを見る。

ケンタロウ「その子を任せたぞ」

と、軽トラツクから降りる。

○画面・ガソリンスタンド

ケンタロウ、給油機を調べる。電源が落ちていて動かない。店の中に向かう。

○画面・ガソリンスタンド店内

ケンタロウ、扉を開けて入って来る。トイレの中から電子音が聞こえてくる。ケンタロウ、トイレに向かう。

○画面・ガソリンスタンド店内のトイレ

ケンタロウ、入って来る。目の前に窓の付いた大きなカプセルが3つ並んでいる。

ケンタロウ、窓を覗く。
中には大人の男が眠っている。隣のカ
プセルの中も覗く。中に少年が眠って
いる。

○劇場

殿森、口を尖らせ息を吸う。

殿森「この展開は想定外やわ」

○画面・ガソリンスタンド店内

ケンタロウ、トイレから出て来ると、
棚に置かれたバイク用の大きなエン
ジンオイルを手取る。

○劇場

殿森、鼻で笑う。

殿森「またそれ飲むんかい！」

○画面・ガソリンスタンド

ケンタロウ、軽トラックに近づいて来

る。

窓から、メガネが少女の髪を掴んで窓ガラスに押し付けている姿が見える。ケンタロウ、急いで軽トラックの元に走り、助手席のドアを開ける。

メガネを外に引きずり下ろし、ショツトガンを取り出しメガネに向ける。

ケンタロウ「何をしている!!」

メガネ「あの子が突然襲いかかってきたんです！」

少女、開いた車の扉から降りてくる。

博之の声「危ない後ろや！」

ケンタロウ、振り返る。

少女、ケンタロウに襲いかかる。

ケンタロウ、少女の片手を掴む。

ケンタロウ「どうしたんだ？」

少女、ケンタロウを睨みつける。

少女「手を離せ！この役立たずが！」

ケンタロウ「まさかこの子も」

と、抵抗する少女を取り押さえ、店の

方へ連れて行く。

○劇場

殿森、腕を組む。

殿森「さっきの人間カプセルが関係してそう
やな」

○画面・ガソリンスタンド

メガネ、カメラ目線になる。

メガネ「人間カプセルって何の事ですか!!」

○劇場

殿森、焦ったように伊田を見る。

殿森「まさかこれ、俺に反応してる？」

伊田「多分」

と、小刻みにうなづく、

○画面・ガソリンスタンド

メガネ、カメラ目線になっている。

メガネ「人間カプセルって何ですか!!」

ケンタロウ、少女を閉じ込めた袋をのせた台車を押し戻って来ると、カメラ目線になる。

ケンタロウ「話してやってくれ。その話」

○劇場

殿森、少し困った表情を浮かべ、隣の伊田を見る。

殿森「えっ、まさかこれ俺が説明すんの？」

浮浪者、前の席に手をかけ殿森の方に身を乗り出す。

浮浪者「さっさと答えろよ！」

殿森「いや、あの……、聞こえますか？」

メガネの声「はい。聞こえます」

浮浪者「聞こえてる決にまっただらうが！」

殿森「あつ、そうですか。あの、さっきケンシロウさんが」

伊田、殿森の手を軽く叩く。

伊田「(小声)ケンタロウさん」

殿森「あつ、さっきケンタロウさんが店内に

入られた時に、人間が入ってるカプセルが
3つ並んでたんですよ」

○画面・ガソリンスタンド

メガネ、驚いてケンタロウを見る。

メガネ「本当ですかケンタロウさん!!」

ケンタロウ「ああ。本当だ。あれが一体何なの
かは解らない。ただ、何か嫌な予感がする」
と、眉をひそめて遠くを見る。

○劇場

殿森、手を上げる。

殿森「あの、いいですか?」

周囲の観客達、殿森の方を見る。

○画面・ガソリンスタンド

ケンタロウ、メガネ、画面の方を見る。

ケンタロウ「話してくれ」

○劇場

殿森、姿勢を変える。

殿森「今、地上がおかしな事になってるじゃないですか。それは多分、核戦争か、隕石が衝突したとか、なんらかの災害が地球に起こったからだと思うんですよ。で、そういう事を知っていた当時の政府や研究機関が、人々をカプセルの中に冷凍保存したんじゃないかと思うんです」

○画面・ガソリンスタンド

ケンタロウ、メガネ、カメラ目線で殿森の話聞いてる。

殿森の声「ただ、当時の技術には問題があつて、冷凍保存をした後遺症として、前頭部に異常が発生して突然攻撃性が高まるような状態を引き起こしてるんじゃないかって思えるんです。だから、事実を知っている人がどこかにいるんじゃないかと」

ケンタロウ「確かに、俺を含めて、この世界で出会う人々には過去の記憶がない。あつ

たとしても、それは崩壊後の世界からだ」
メガネ「でも、僕の記憶は全く途切れていま
せんよ。崩壊前の時代から繋がっています」
ケンタロウ「そう言えば、さっきそのような
事を言っていたな？」

メガネ「はい。僕は地上が崩壊する前に電車
に乗って、映画館に行きました。でもチケ
ットを落としてしまっただけに出ました。そ
したら、地上がこんな常態に……」

ケンタロウ、メガネに一步近づく。

ケンタロウ「その映画館の人々は？」

メガネ「僕が生きているって事は。多分、多く
の人達がいるはずだ」

ケンタロウ「行こう。何か答えがあるはずだ」

と、メガネと顔を合わせて頷き合う。

ケンタロウ、袋に詰めた少女を、軽ト
ラックの荷台に乗せて、運転席に乗り
込む。

メガネ、助手席に乗り込む。

軽トラック、走り去って行く。

○画面・軽トラックの車内

車内に高回転のうるさいエンジン音が響いている。

ケンタロウ、運転している。

メガネ、助手席に座っている。

メガネ「軽トラックって早いんですね」

ケンタロウ「4WDプラスマニュアルミツシ

ヨンだ」

と、メガネに不敵な笑みを見せる。

○劇場

森川、不満そうに顔を横に振る。

博之、うれしそうな表情になる。

博之「うおー」

と、小刻みに頷く。

○画面・軽トラックの車内

メガネ、助手席に座っている。

運転しているケンタロウ、ダッシュユボ

ードの中から、カナヅチを取り出し、

メガネに差し出す。

メガネ「これは？」

ケンタロウ「もし俺が豹変した場合、迷わずこれを使え。そして、少女と人々を救う手立てを探すんだ」

メガネ「こんな臆病な僕に……、そんな事ができるとは思えませんよ……」

ケンタロウ「できるさ。君はこの時代を生き抜いているんだ」

メガネ「自分は、ただ映画のチケットを落とすだけです」

ケンタロウ「それが運命のチケットを手にしたって事さ」

メガネ、しぶしぶ納得する様にカナヅチを受け取る。

○映画館・劇場

殿森、険しい表情になる。

殿森「もしかして向ってる映画館ってここ違うやろうな？」

と、隣の伊田を見る。

伊田「ありえるね。音声認識ソフトを使って
るぐらいだから：：多分それだよ！」

殿森、ため息を吐いて顔を横に振る。

殿森「俺はそういう部類のエンターテイメン
トは求めてないで。それはアトラクション
施設でやる事であって、映画観でやる事じ
ゃないやろ？」

伊田「でも音声認識システムの事を考えると、
もう既にアトラクションになってない？」
殿森「確かにそうやな。言われな気づかんか
ったわ。それを考えると、いい意味で裏切
る展開を用意してる可能性もあるな。ちよ
っと興味湧いてきたわ」

と、伊田と同時に画面に視線を移す。

○画面・軽トラックの中

メガネ、窓から外を見ている。

メガネ「あの映画、結局一生見れないままに
なりそうだなー」

ケンタロウ、運転しながら、やさしそうな表情になり、メガネを見る。

ケンタロウ「思い入れでもあるのか？」

メガネ「[∞]年前からインターネットで宣伝されていたんです。ずっと面白そうだと思っ
ていて、上映開始日に見に行ったら、この
有様ですよ」

ケンタロウ、笑みを浮かべる。

ケンタロウ「なんて映画だ？」

メガネ「デッドタウン救世主物語です」

○劇場

殿森、勢い良く画面から視線を逸らす。

殿森「やっぱりそうきたか」

伊田、画面から殿森に視線を移す。

伊田「これ最後どうなるの？映画じゃなくなるんじゃない？」

殿森「それが俺も心配やわ。映画の間にアート
ラクションを入れたら絶対雰囲気壊れて
しまうやろ。それはエンターテイメントと

して失敗やで」

伊田「やっぱり来るなら最後に来るよね」

殿森「来たとしても主役じゃないで多分。奴らとか言う誰にでもできるキャラが入って来るってオチやろ。最悪主役の格好した別人とかな」

と、伊田と困った表情で画面を見る。

○画面・映画館の外

軽トラック、走って来ると停止する。

ケンタロウ、メガネ、降りる。

映画館の扉の元にやって来て、開けようとするが、鍵がかかっていて開かない。

メガネ、ケンタロウと目を合わせ、顔を左右に振る。

足音が近づいてくる。

ケンタロウ、メガネ、足音の方を向く。ブリーフだけを履いている老人、歩いて近づいて来る。

ケンタロウ「あんたは？」

老人「気がついたら」

と、近くにある廃れた飲食店を指さす。

老人「その店にいたんです。何が起こっているんですか？」

ケンタロウ「じいさん、少しここで待っていてくれ」

と、廃れた飲食店の方へメガネと走る。

メガネ「あの人も豹変するんじゃない？」

ケンタロウ「俺も同じ事を考えていた。その

答えがこの先にあるはずだ」

と、さらに速く走る。

○画面・廃れた飲食店の店内

ケンタロウ、メガネ、入って来る。

カプセルが無数に並んでいる。

メガネ「これが……人間カプセル……」

と、カプセルの窓を覗く。

中年の女性が中で眠っている。

メガネ「中年の女性が……」

隣のカプセルの窓を覗いているケン
タロウ、顔を離す。

ケンタロウ「何も入っていない」

外から息切れした老人の呼吸と足音
が聞こえてくる。

老人、店の外からケンタロウ達を睨ん
でいる。

ケンタロウ、メガネ、呆然と老人の方
を見る。

ケンタロウ「お前はここで待っている」

と、ショットガンを取り出し外に出る。

○画面・廃れた飲食店の外

ケンタロウ、ショットガンを片手に外
に出て来る。

老人、ケンタロウに襲いかかる。

老人「この裏切り者！殺してやる！」

ケンタロウ、ショットガンで老人を叩
いて気絶させる。

○画面・廃れた飲食店の店内

メガネ、窓の外の様子を見ている。

メガネ「裏切り者？…」

中年の男、メガネの背後から近づいて来る。

中年の男「私の店で何をしているんですか？」

メガネ、振り返って中年の男を見ると、
急いで店の外に逃げる。

中年の男「待ちなさい！」

と、全力疾走でメガネを追いかける。

○画面・廃れた飲食店の外

メガネ、走って出てくる。

メガネ「ケンタロウさんまだおかしな人が！」

と、ケンタロウの背後に隠れる。

中年の男、ケンタロウに近づいて来る。

中年の男「何が起こっているんですか？」

ケンタロウ「動くな」

と、ショットガンを向ける。

中年の男、立ち止まる。

ケンタロウ「あんたら、一体何者なんだ？」
中年の男「何者って、そりやあんたと……」

と、倒れている老人を見て呆然として
から、走って飲食店の中に逃げて行く。

メガネ「この人達、普通じゃないですよ」

ケンタロウ「そのようだ。早くこの場を後に
した方がよさそうだ」

中年の男、老人⇨人、廃れた飲食店の
中から、ケンタロウ達の方へ走って来
る。

ケンタロウ、メガネ、逃げる。

○画面・映画館の外

ケンタロウ、メガネ、停車している軽
トラツクの前を走って来て乗り込む。
追ってきた中年の男、老人⇨人、軽ト
ラツクの扉を開けようとする。軽トラ
ツク、急発進する。

○画面・軽トラツクの車内

後ろの窓から、追いかけて来る中年の男、老人の姿が離れて行く。

○劇場

博之、静江、画面を見ている。

静江「えらい恐ろしいな」

博之「うおー」

殿森、伊田、画面を見ている。

野中、その隣で、顔を引きつらせて腹を押さえている。

野中「ちよつと、トイレ行って来るわ」

と、劇場から出て行く。

伊田「もしかして、怖がってんじゃないの？」

殿森「これを21歳の学生がか？」

と、伊田と静かに笑い出す。

○映画館のトイレ

会社員、鏡の前で下を向いて黙り込んでいる。

野中、その後ろを通り過ぎて、個室に

入る。

○トイレの個室

野中、便器に座っている。

外から扉を叩かれる。

会社員の声「君、ちよつといいかい？」

野中「なっ、ななっ、何ですか？」

会社員の声「恐ろい事が起こっているんだ！」

野中「ちよつと待ってください」

会社員の声「ならそこで聞いてくれ。外に出

ると、街が映画の世界になっているんだ！」

野中「(小声)なんやこの人……」

と、怯えるように目を左右に泳がせる。

扉が叩かれる。

野中、驚く。

会社員の声「まだかい？」

野中「まっまっ、待ってください！」

会社員の声「早くしてくれないか！」

野中、視線を泳がせて怯える。

○画面・廃れた道路

悪太郎を先頭に、悪次郎、暴走族、バイクに乗って走っている。

○劇場

殿森、伊田、黙って画面を見ている。

画面には、映画館が映っている。社員、その扉を開けて外を覗く。

会社員「これを見てくれ」

野中、会社員の隣から外を覗く。

殿森「あれ？」

と、眉を顰める。

伊田「これ、野中だよね？」

殿森「まさかアイツ、この映画に出演してたんか!!」

と、確認するように画面をじっと見る。

殿森「間違いない。これ野中やわ」

伊田「だからこの映画に誘ってきたんだ」

殿森「そういうオチやったんか」

と、伊田と顔を合せる。

○画面・映画館の外

野中、周囲を見渡しながら歩いている。

野中「これって、デッドタウンですか？」

前を歩く会社員、立ち止って、野中の方に振り返る。

会社員「そうさ。これが僕達の現実だよ」

野中、呆然と佇む。

○画面・寂れた繁華街

誰も人がいない。

野中、会社員とやって来ると周囲を見渡す。

野中「ここにエスカレーターがあつて、そこに

ビルが見えて……全部なくなつて……

何があつたんですか？」

会社員「僕が聞きたいぐらいだよ」

暴走族のバイクの音が聞こえてくる。

野中「この音つてもしかして」

会社員、目をつむって音に集中する。

希望に満ち溢れた表情で目を開ける。

会社員「ついに自衛隊が救出活動に来たぞ！」

野中「これって、奴らじゃないですか？」

会社員「知っているのかい？」

野中「人間の皮を被った悪魔達じゃ……」

会社員「映画じゃないんだから。これは現実

だよ。自衛隊のバイク部隊さ」

野中「さつき映画の世界って」

会社員、顔を振る。

会社員「これは現実だ」

野中、焦って周囲をうろろする。

野中「早く逃げましょう！殺されますよ！」

会社員「こんな状態だから混乱するのも解る。

でも冷静になるんだ。これは自衛隊だよ」

野中、映画館の方へ走って逃げる。会

社員、呆れるようなため息を吐く。

○画面・映画館の前

野中、映画館の前に走ってやって来る。

目の前に、バイクにまたがった悪次郎
がいる。

野中、驚いて立ち止る。

悪次郎「おっ！」

と、目を見開いて野中を見る。

悪次郎「(大声)兄貴！一匹見つけたぞー！」

と、エンジンを吹かす。

暴走族達、バイクに乗ってやって来る
と、野中を囲んで、激しく体を動かす。

暴走族 A 「ホーホーホーウツ！」

暴走族 B 「アウオーウツア！」

暴走族 C 「イーガツパ！ああああー」

と、おかしな雄たけびを上げだす。

○劇場

殿森、吹き出すように笑ってしまう。

伊田、釣られて笑いだす。

○画面・廃れた繁華街

バイクの音が響き渡っている。

会社員、映画館の方向を向いている。

会社員「おーい！こっちだー！」

と、映画館の方に小走りをする。

○画面・映画館の外

会社員、やって来ると、驚いて物陰に隠れる。

その先に、暴走族達、集まっている。悪太郎、頭に斧が刺さった野中の死体を担いで、仲間の軽トラックの荷台に投げ込む。野中、上を向いて死んでいる。

○劇場

両腕を組んでいる殿森。

殿森「もう殺されるんかい」

○画面・映画館の外

悪太郎、手を上げる。

悪次郎、暴走族達、静まり返る。

悪太郎「おい、この辺りに沢山いるはずだ！探し出せ！命令だ！」

暴走族達、雄たけびを上げると、動きまわりだす。

○劇場

殿森、伊田の座っていた席が空いている。

○画面・映画館の外

会社員、暴走族が離れている隙に、物陰から映画館の扉に走って行き、中に入る。

悪次郎、その姿を遠くから見ている。

悪次郎「そこだったのか」

と、ニヤニヤと笑みを浮かべる。

○画面・映画館の中

会社員、走って来ると、そのまま階段を上って行く。関係者以外立ち入り禁止と書かれた扉を開けて中に入る。

○画面・映写室

会社員、扉を開けて入って来る。

無数のコンピューター、大きな画面がいくつも並んでいる。6あるディスプレイには、ケンタロウ、暴走族、街の風景などが映し出されている。

博士(88)、その中心に座っている。

会社員「大変です。街が崩壊して映画のようになっているんです！」

博士、振り返って会社員を見る。

○映画館・男子トイレ

殿森、伊田、並んで用を足している。

殿森「まさかアイツが出演してるとは思いも

せんかったわ」

伊田「本当にまさかだよね」

殿森「そりや俺達を映画に誘う訳やで」

伊田「やっぱり、芸能プロダクションに入っ

てたのかな」

殿森「それか、オーディションを受けたら通

ったとかちやうか」

伊田「それかも。ほぼキャストだったしね」

殿森「多分そういうオチやで」

伊田「でもアイツ、どこに行っただらう？」

殿森「もしかして映画が終わったら出演者の挨拶があるんと違うか。その為の準備に行ってる可能性もあるで」

伊田「じゃあ控え室に？確かに一応出演者だよね。でも、そういうのって始まる前じゃないの？」

殿森「そうなんか？」

伊田「最後だとみんな帰っちゃうでしょ？」

殿森「俺には解らんわ。今の時代の映画文化が。音声認識システムはあるし、映画館に来るみたいな事を言い出すし、予想外の事だらけやわ」

と、先に手洗い場に向かう。

○映画館の中

会社員、階段を走って降りて来ると、

裏口の方へ走って行く。

少しすると、殿森、伊田、すぐ近くのトイレから出て来て、劇場の方へ歩いて行く。

○劇場

殿森、伊田、扉を開け入って来ると席に向かう。

博之の声「危ない！そっちはあかん！」

殿森、伊田、席に戻ると画面を見る。

○画面・映画館の外

会社員、物陰に隠れて外を見ている。

暴走族達、映画観の周囲を走り回ってから、別の場所へ移動する。

博之の声「今や！」

会社員、汚い小屋に向って走る。

○画面・汚い小屋の中

会社員、扉を開けて入って来る。中に

スクーターが止まっている。

会社員「これか……」

と、スクーターに鍵を差し込んで回す。スクーターに付いているGPSの画面に、目的地を示す赤い光が点灯しだす。

会社員「ここか。近いな。よし」

と、スクーターに乗り、エンジンをかけ急発進させる。

○画面・汚い小屋の外

スクーターに乗った会社員、小屋から飛び出し、低速で走り去って行く。

○画面・殺風景な道路

会社員、スクーターに乗って走っている。GPSに表示されている、赤い点に近づいていく。

○画面・殺風景な通路の脇

軽トラック、廃車の横に止まっている。
ケンタロウ、ホースを使って、廃車からガソリンを抜き取っている。

メガネ、用を足している。

会社員、スクーターに乗ってやって来る。
る。

会社員「ケンタロウさん！」

と、ケンタロウの目の前にスクーターにまたがった状態で停車する。

ケンタロウ「あんたは？」

会社員「私は映画館から来ました。デットタウン救世主物語を見ていた観客です」

メガネ「デッドタウン救世主物語？」

と、チャックを閉め会社員の元に行く。

メガネ「その映画の上映日と時間は？」

会社員「今日の2時です」

メガネ「同じ場所だ。じゃあ映画館の人達は？」

会社員「みな無事です」

メガネ「よかつか。でも、一体何が……」

会社員「あそこは地上で起こった事を知って

いる、博士が作ったシエルターです」

ケンタロウ「その話、詳しく聞かせてくれ」

○劇場

観客達、真剣な表情で画面を見ている。

会社員の声「今起こっている事は、超自然原

理主義と言われる思想を持った人々が起

こしたテロなんです」

ケンタロウの声「超自然原理主義？」

会社員の声「はい。彼らは自然によって支配

される、原始的な世界を理想としています。

だから邪魔になる人間や文明を破壊した

んです。博士はそのメンバーでしたが、彼

らの考えに疑問を抱き、人々を守る事ので

きるシエルターを作り上げました。しかし、

誰も博士を信用しなかった。そこでシエル

ターを映画館の様に作り変え、上映する映

画の宣伝をして人々を避難させたんです。

だから映画館に映っている映像は、小型情

報端末が映し出す現実なんです」

○画面・殺風景な道路の脇

ケンタロウ、メガネ、会社員、向き合っている。

ケンタロウ「その博士から、突然豹変する人々の事を聞いたか？」

会社員「それはまだ聞いていません」

ケンタロウ「なら博士の元に行こう。そして、彼らを救う為にその手立てを探すんだ」

会社員「博士はシエルターにいます。でも今行くのは危険です。暴走族がシエルターの周辺で暴れまわっています」

ケンタロウ「早くしないと博士とそこにいる人々が危ない」

会社員「ですが、敵は大勢いますよ」

ケンタロウ、ショットガンを取り出す。
ケンタロウ「邪魔するヤツは指先一つで倒すさ」

○劇場

殿森、眉を潜めて伊田を見る。

殿森「なんか聞いた事あるぞこの言葉」

伊田「北斗の拳のテーマソングだよね。歌詞を微妙に変えて台詞にしてる」

殿森「そこまでやるかって感じやな。それが面白さにつながるとは思えへんで。予想外の連発やわこの映画」

と、呆れた表情で顔を横に振る。

○画面・映画館の外

悪太郎、悪次郎、暴走族達、バイクにまたがり、エンジンを吹かして、映画館の扉を見ている。

悪太郎「本当にこんな場所にいるのか？」

悪次郎「間違いないぜ。さっきこの中に入ってたのを俺は見たぜ」

悪次郎「よーし。全部まとめてぶっ潰すぞ！」

暴走族達、雄叫びを上げだす。

暴走族A「うっぎやーンガガガガガ！」

と、顔を激しく振る。

○劇場

殿森、笑う。

○画面・映画館の外

暴走族B、暴走族C、扉を見ている。

暴走族B「ゴ―ウツ、バババツパーババ！」

暴走族C「ギャツバー！オギヤギヤギヤギ

ヤ！オギヤギヤギヤツ！」

と、体を痙攣したように動かす。

○劇場

殿森、伊田、さらに笑う。

殿森「これ絶対ウケ狙ってるだけやろ」

○画面・映画観の外

先頭にいる悪太郎、手を挙げる。

悪太郎「行くぞー！」

と、バイクを走らせ扉を突き破って中に入る。

悪次郎、暴走族達、続く。

○画面・映画館

悪太郎、悪次郎、暴走族達、入って来ると、停止する。

悪太郎、劇場Bの扉を指差す。

悪太郎「まずはあの扉をぶち破れ！」

暴走族達、一斉に走りだす。

○劇場B

人がいない薄暗い劇場。

悪次郎、暴走族達、バイクに乗って扉を突き破って入って来る。鉄の棒や斧を振り回し、席や壁を破壊して行く。

○画面・映画館

悪太郎、バイクにまたがっている。

暴走族達、悪次郎、バイクに乗って、劇場Bの反対側の扉を突き破って出てくる。

悪次郎「兄貴、誰もいねえぜ！」

悪太郎「そうか。じゃあ、次は」

と、周囲の扉を見渡し、劇場の扉を指さす。

悪太郎「あれだ！おめえら行くぞ！」

と、劇場の扉に向かって急発進する。

○劇場

悪太郎、バイクに乗って扉を吹き飛ばして入って来る。

観客達、一斉にその方向を見る。

悪次郎、暴走族達、そこから続いて入って来る。

殿森、伊田、嬉しそうに暴走族を見る。

殿森「予想通り来たぞ。主人公以外が」

画面には、この劇場の光景が映し出されている。

暴走族達、前列をバイクで走りながら、鉄の棒や斧を振り回して客を襲っていく。

前列の客達、襲われて逃げ出す。

客△、逃げていると、追って来る暴走

族のバイクに轢かれる。

伊田「あれ本当にバイクでぶつけてない？」

殿森「前列は全部エキストラやろ。冬にこの映画を上映した理由もそれやで」

伊田「どういう意味？」

殿森「厚着の時期なら中にプロテクターを着ても隠せるやろ」

伊田「なるほどね。それなら棍棒で叩かれても怪我しないよね」

殿森「それがスタントの常識やで」

暴走族達、次から次へと客を襲う。

殿森「この演出は見ごたえあるわ。でもエキストラ何人いるねん？」

暴走族達、客をひきながらも、周囲の客を鉄の棒と斧で攻撃して行く。

伊田「ちよつとやり過ぎじゃない？前の方の

客席ボロボロだけど」

殿森「それが本当のエンターテイメントやで」

伊田「確かに。雰囲気ある。うん」

と、納得するように深くうなづく。

前方の客達、劇場の外に逃げて行く。
暴走族達、その観客達を追いかけて扉
から出て行く。

悪太郎のバイク、後ろの席の方へ続く
通路を走る。

浮浪者、その前に立ちほだかる。

浮浪者「いいぞいいぞ！行け行け！」

悪太郎、浮浪者の首を斧で切る。浮浪
者の頭がどこかへ飛んで行く。

殿森、伊田、それを顔で追う。

伊田「すごい！」

殿森「これは一級のエンターテイメントや！

ホー！」

と、立ち上がって拍手をする。

暴走族達、殿森を見る。

悪太郎、殿森と数秒間、目が合う。

悪太郎、殿森に斧を投げる。

殿森、ギリギリで斧をよけ、後ろを見
る。

自分の席に斧が深く刺さっている。

呆然と伊田と顔を合わせる。

悪太郎 「次はアイツだ！」

と、暴走族達と殿森の方に走って来る。

殿森、伊田、走って逃げだす。

○映画館

殿森、伊田、走って劇場の扉から出て来ると、全力で走って行き、別の扉を開けて外に出て行く。

暴走族達、劇場の扉から勢い良く出て来る。

○映画館の外

殿森、伊田、映画館の扉から出て来ると、汚い小屋の方に走って行く。

○劇場

暴走族が姿を消している。

後席の観客達、楽しそうに座っている。前方の観客達、混乱している。周囲に

無数の死体が落ちている。

博之の声「えらいこっちゃ！おばあちゃんがやられてもうた！」

周囲に死体が落ちている中、森川、石飛、檜崎、前席と後席の間から、覗く様に前方を見ている。

森川「ホンマどうなってんねん？」

石飛「これ映画館ねらったテロ？」

○画面・廃れた道路

軽トラック、猛スピードで走っている。

○劇場

画面には、助手席に座っているメガネ、荷台に乗っている会社員、運転しているケンタロウの姿が映し出されている。

客B、画面の前にやって来る。

客B「ケンタロウ！暴走族が劇場の中にやって来て、沢山の観客が殺された！」

ケンタロウ「なんだって!!」

客B「このままじゃ全員殺される!」

ケンタロウ「今向っている。それまで持ちこたえてくれ」

○軽トラの車内

ケンタロウ、運転している。

メガネ、助手席から外を見ている。

会社員、荷台に乗っている。

小型情報端末、宙に浮かんで、軽トラ
ックと拮抗して移動している。そこか
ら声がする。

客Oの声「奴らがまた戻って来たら、全員殺
されるぞ!」

メガネ、窓から身を乗り出し、小型情
報端末をマイクを持つように手でつ
かみ、口に近づける。

メガネ「諦めないください!」

会社員、荷台に乗っている。

会社員「そうです。殺されると思うなら、戦

つてください！自分もこれからそうするつもりです！」

と、握りこぶしを見せる。

○劇場

画面には、カメラを握るメガネの顔が拡大されて映っている。

客B、客C、画面の前に立っている。

客C「そんな無茶だ」

客B「あの感じだと、また戻って来るぞ」

客C「じゃあどうすんだ？」

客B「この状態、戦うしかないぜ。ここでは俺達の方が数も多いんだ」

客C「だけど、あんな連中と俺達が……」

森川、石飛、檜崎、前席と後席の間から画面を覗いている。

森川「聞いたか？またバイクの人らが戻って来るかもしれないやっつて」

石飛「どうしようか」

森川「どうせ殺されるなら戦った方がええつ

て言うてたな」

石飛「やるの？」

森川「俺は戦うわ。先に行かせてもらおうで」

と、立ち上がると、全力疾走で劇場の外に走って行く。

○映画館のトイレの入り口前

男子トイレの入り口と、女子トイレの入り口が並んでいる。

森川、走って来ると、そのまま女子トイレの中に駆け込んで行く。

○女子トイレの中

森川、個室の中に入って、ドアを閉める。鍵の閉まる音が響く。

○劇場

石飛、檜崎、前席と後席の隙間に隠れている。

石飛「森川君って、カッケーなー。すげえ度

胸あるし、男らしいって言うか」

榎崎「でも、大丈夫かな。たった1人で」

石飛「やっぱり、まずいよね？」

榎崎「絶対やられるよ。相手は大人だし……」

石飛「俺、森川君呼んでくるわ！」

と、急いで劇場の外に走って行く。

○画面・映画館の外

石飛、扉から出てくる。目の前に、悪太郎、悪次郎、暴走族達、バイクに乗って集まっている。

悪次郎「出てきたぞ！」

石飛「やべっ」

暴走族達、エンジンを吹かしだす。

軽トラック、石飛と暴走族の間に走って来て止まる。

石飛「ケンタロウさんだ！」

ケンタロウ、メガネ、荷台に乗っている会社員、軽トラックから降りる。

悪太郎「お前はあの時の！」

ケンタロウ、悪太郎にショットガンを向ける。

悪次郎「銃だ！」

と、暴走族達、動きが止まる。

ケンタロウ「早く中へ！」

石飛、映画館の中に逃げる。

メガネ、カナヅチを悪次郎に向ける。

悪次郎「くそっ！兄貴！このままじゃ俺達が

やられちまうよ！」

悪太郎「いったん引くぞ！」

と、悪次郎、暴走族と逃げて行く。

メガネ「やった。連中を追い払った」

ケンタロウ「まだ油断はできない。破壊と殺

戮を繰り返す連中だ。必ずまた戻って来る」

と、映画館の中へ向かう。

○画面・映画館の出入口・内側

ケンタロウ、メガネ、会社員、入って来る。

桃太郎(45)、階段の上にある映写室の

扉を開けて出てくる。

桃太郎「ケンタロウさんですね？」

ケンタロウ「あんたは？」

桃太郎「私は博士の実の息子の桃太郎です」

○画面・映写室

室内は荒らされている。

ケンタロウ、会社員、メガネ、桃太郎、倒れている博士を囲むように立っている。

桃太郎「私は父の言う事を信じていなかった。

だから新しく作った映画館に家族で映画を見に来いと言われたのに、1人で……」

会社員「まさか、あなたのご家族は？」

桃太郎「父は精神疾患ではなかった……」

と、下を向いて泣きそうになる。

ケンタロウ、桃太郎の肩に手を乗せる。

ケンタロウ「ヤツらがまたこの場に戻って来る。教えてくれ。なぜ善良な人々が突然豹変するんだ？」

桃太郎「それは、サイボーグだからです」

ケンタロウ「サイボーグだって？」

桃太郎「医療や介護用に作られたものです」

メガネ「まさかそんなものがこの世の中に？」

桃太郎「普段から誰も気づいていないだけで、

街中にはサイボーグがあふれていると父

は言っていました。そこに彼らが、別のプ

ログラムを組み込んだんです」

ケンタロウ「別のプログラム？」

桃太郎「生き残った人々の殺害です」

会社員「超自然原理主義者だ！」

桃太郎「そうです。大企業や政治家、投資家、

そして軍事の世界にも超自然原理主義者

は紛れ込んでいます。彼らに兵器を使わせ

て世界を破壊させる。次に生き残った人々

を殺害するのがサイボーグです」

メガネ「それが暴走族？」

桃太郎「そうです。それでも生き残った人々

はどこかに隠れ、新たな文明を作り上げ対

抗します。それを阻止する為に、今度は善

良な市民や被害者を装った殺人マシン
が人々の元に潜入する」

メガネ「という事は、それが豹変する人々の
正体ですか？」

博士「はい。そうです」

メガネ「なら、あの少女も」

博士、頷く。

会社員「あの少女を破壊しないと！」

桃太郎「ダメです。破壊すれば爆発します」

メガネ「爆発……」

桃太郎「その為に水素をエネルギー源として
動くように作られているんです」

会社員「とんでもない話だ。それを環境の為
とでも言うんだろうな」

メガネ「その自然原理主義者はどこに？」

桃太郎「彼らはもう砂になっています」

会社員「自分達の妄想の実現の為に、世の中
の人々を巻き込むなんて」

メガネ「これから、僕達はどうなるんですか？」

桃太郎「もう計画は実行されてしまいました」

メガネ「このまま滅びると言うんですか？」

桃太郎、顔を背ける。

ケンタロウ、桃太郎の肩に手を乗せる。

ケンタロウ「俺達はまだ生きている。君の親父さんがこのシエルターを作った理由を考えるんだ」

桃太郎、ケンタロウを見る。

ケンタロウ「超自然原理主義を打倒し、安全で平和な世界を作り上げる。それが生き残った人々の救いであり、君の父親が目指した事だ。そう思えないか？」

会社員「それに、この映画館には、まだ幼い子供達だっているんですよ」

桃太郎、悩む表情を浮かべる。

桃太郎「そう……です……ね……」

と、ポケットからリモコンを取り出し、画面に地図を表示させる。

桃太郎「宇宙空間に存在する兵器を操作する事のできる施設です。それを使えば超高出力電磁パルスを発生させ、地球上にある全

ての電子機器を破壊することができます」
メガネ「という事は？」

桃太郎「おそらく、サイボーグは全滅します」
会社員「ならそれを押せばいいだけだ！」

桃太郎「しかし、それ以外に弊害が」

会社員「今はそんな事を言っている場合じゃない！ケンタロウさん！行きましよう！」

桃太郎「しかし……」

メガネ「ケンタロウさん、僕も行きます！」

ケンタロウ「君達はここに残るんだ」

メガネ「なぜですか？僕達も戦います」

会社員「私も同じ意見です」

ケンタロウ「駄目だ」

メガネ「そんな僕達が頼りないですか？」

ケンタロウ「違う。俺がいない間、このシェルターにいる人々を誰が守るんだ？」

メガネ、会社員、黙り込む。

ケンタロウ「シェルターの人々の事を頼む」
メガネ「わかりました」

会社員、少し遅れて、力強く頷く。

○汚い小屋

殿森、伊田、座っている。

伊田「外の景色が映画と同じって事は、これってやっぱり現実じゃない？」

殿森「でも俺達は生きてるよな。怪我もしてないし。という事はあの劇場の観客は全員エキストラって事はないか？」

伊田「全員がエキストラなら絶対赤字になるでしょ」

殿森「商業施設ならそうやろな」

伊田「どういう事？」

殿森「一般大衆を相手にしたドッキリ番組と
考えてみたらどうや？野中が俺達を誘い
出して、画面にまで登場したんやで。それ
を考えればつじつまが合うやろ？」

伊田「視聴者参加型ドッキリ番組!!」

殿森「それが一番現実的やで。ただ、あの斧
はどういう事や？俺に向って投げて、よけ
たら椅子に突き刺さってた」

伊田「何か仕掛けがあるんじゃない？当たっ

ても怪我しないヤツだよね絶対」

殿森「そうか。あの椅子には最初から仕掛けがあつたんや。俺達が暴走族に気を取られて正面を見てる隙に何かをしたんや。あれだけの数のエキストラがいればそんな事は簡単にできる。そう考えればやり方はいくらでもあるわ。となるとこれはドッキリ番組や」

伊田「でも今の時代にここまで大それた番組を作れるかな？」

殿森「テレビで見ると現実とその場にいるのとは違うんで」

伊田「でもドッキリの為にあそこまでの映画を作るって事は、相当な予算が必要だよ。さすがに無理だと思うけど」

殿森「資金力のある海外のテレビ局が日本でドッキリを仕掛けてる可能性はどうや？」

伊田「あー、それありえるかも」

殿森「あの映画の内容を考えれば、とても日本の映画の発想とは思われへんやろ」

伊田「アメリカのテレビ局とか？」

殿森「この感じやと、そういうオチになりそうやで」

伊田「それかー。じゃあこれからどうしよう」

殿森「おそらく、そのドッキリ番組は日本だけじゃないで。少なくとも数カ国、多ければ数十カ国に放送されるはずや。ここでの俺達の行動を世界が見てるわけや」

伊田「それすごいよね」

殿森「だからカッコいい所を見せといたら、数年間くらいはスターになる可能性もあるで」

伊田「でも俺そんなに華ないし」

殿森「それは日本でやる。世界では解らんで。太った女性が好きとか、そういう価値観もあるやん。だからお前のその貧弱な感じとか、色白で大人しい感じがいいって国もありえるで。ただそれだけじゃただの人やん」

伊田「って事は」

殿森「ここで活躍すれば間違いなく注目が集

まる」

伊田「で、どうするつもり？」

殿森「とりあえず、俺は一番儲かる国にアピールしてみらわ」

伊田「アメリカっていうか、ハリウッド進出を狙うとか？」

殿森「それやな。アメリカってマチョイズムやろ。筋肉質で男らしいタフガイが人気やん。だから俺はターミネーターみたいに攻めるわ。それでアメリカの視聴者の間での人気をまず獲得する事を目指すわ」

と、真剣な顔で、素早く深くうなづく。

○映画館の外

メガネ、会社員、映画館の扉を見ている。

メガネ「映画館の扉は全部で5つ」

会社員「よし、全て塞ごう」

そこに、2人の足音が近づいてくる。

メガネ、会社員、その方向を見る。

その先に、殿森、ハチマキで片目を隠し、上半身裸で、全身茶色い油まみれになって、バイクのマフラーを機関銃を持つようにして立っている。

殿森「(低い声)ユーオーライ？」

伊田、隣にやって来る。

会社員「君達は何者だ？」

伊田「デッドタウン救世主物語の観客です」

メガネ「その映画の上映日と時間は？」

殿森「(低い声)トゥーハンドレット、デイス、

アフタヌーン」

メガネ、会社員、顔を合わせる。

○映画観の出入口・内側

観客、続々と物を持ってやって来ると、扉を塞ぐように置いていく。

会社員、観客達、扉の前に物を積み重ねている。

会社員「急いでください。彼らは必ず戻ってきます」

メガネ、映画館の座席を持ってくる。

石飛と榎崎、大きなスピーカーカーを2人がかりで運んでいる。

殿森、自動販売機を引きずって来ると、扉の前に置く。

石飛「あの人すげえ」

榎崎「どの人？」

石飛「あそこの脱獄囚みたいな人」

榎崎、石飛の見ている方を見る。

殿森、手を動かし、観客を扉の方に誘導する。

殿森「(低い声)カモンベイビー！」

と、格好をつけたポーズを決める。

○劇場

桃太郎、入って来て画面の前に立つ。

○画面・殺風景な道路

軽トラックが走っている。

○映画館の外

映画館の出入り口が、内側から物で完全に塞がれている。

○映画館の出入口・内側

物が扉を塞ぐように置かれている。

観客達、疲れた様に立っている。

メガネ、タオルで額の汗を拭く。

会社員、両腕を組んで塞がれた扉を見ている。

会社員「これでしばらくは奴らの侵入を防げるだろう」

殿森、目を細め、片足を物の上に乗せ、格好をつけて口から空気を吐き出す。

○劇場

桃太郎、画面の正面に立っている。

画面には、ケンタロウが軽トラックを運転している姿が映し出されている。観客、続々と戻って来て画面を見る。

○画面・建物の前

軽トラック、走って来ると停車する。
ケンタロウ、軽トラックから降りる。
建物を見上げる。

ケンタロウ「ここにそのボタンが」
と、建物の方に走って行く。

○画面・建物の入り口・外

ケンタロウ、扉の前にやって来る。ポ
ケットからカギを取り出して扉を開
け、中に入る。

○建物の中・通路

ケンタロウ、扉の元に歩いて行く。
その隣を、丸く小さい小型情報端末が
拮抗して飛んでいる。

桃太郎の声「ケンタロウさん。扉のすぐ横に暗
証番号入力キーがありますか？」

扉の隣に、番号入力キーがある。
ケンタロウその前に立つ。

ケンタロウ「ああ」

桃太郎「暗証番号は77777777、7を7回です。それで開くはずです」

ケンタロウ、7のボタンを7回押す。鍵の開く音が響く。ケンタロウ、扉を開けて中に入る。

○建物の中・司令室

パソコンが何台も並んでいる。

ケンタロウの正面に、大きな装置がある。ケンタロウの横を丸く小さな小型情報収集端末が飛んでいる。

桃太郎の声「目の前にある大きな赤い解除レバーを上げてください」

ケンタロウ、赤いレバーを上げる。

おぼさんの声「超高出力電磁パルスを発射させるパスワードを入力してください」

桃太郎の声「パスワードは先ほどと同じです」
ケンタロウ、7を7回入力する。

おぼさんの声「超高出力電磁パルスの発射ま

で、残り10分です」

○映画館

桃太郎、画面の前に立っている。

桃太郎「ケンタロウさん、これで、サイボーグは全て破壊されます」

観客達、歓声を上げる。

メガネ、安心する様に息を吐く。

会社員、ガッツポーズをする。

床に座っている博之、隅で落ち込む様に下を向いて、口を尖らせている。

○画面・建物の通路

ケンタロウ、開いた扉から出てくると、出口の方へゆっくりと歩いて行く。

○画面・建物の出入口・外

ケンタロウ、扉を開けて出てくる。

悪太郎、悪次郎、立っている。

その背後に、バイクにまたがった暴走

族達、周囲を囲むように埋め尽くしている。

悪太郎「見つけたぞ！」

暴走族達、雄たけびを上げだす。

○劇場

桃太郎、メガネ、会社員、観客達、驚いて呆然とする。

客D、画面の前に走って来る。

客D「おいバイクの野郎ども！道を開ける！」

悪太郎の声「あっ、なんだと!？」

画面に映る悪太郎、悪次郎、バイクにまたがった暴走族達、カメラ目線になる。

○建物の前

悪太郎、悪次郎、バイクに乗った暴走族達、浮いている小型情報端末を睨みつけている。

客Dの声「あと数分で超高出力電磁パルスが

放たれてお前らは破壊されるんだ！」

悪太郎「なんだとー！」

と、慌てだす。暴走族達、ざわめく。

客Bの声「お前らの負けだ。だからおとなしく道を開けてケンタロウを通せ！」

悪太郎「クソー！」

と、自分の体を叩く。

○劇場

観客達、歓声を上げる、

○画面・建物の前

悪次郎、焦って動き回る。

悪次郎「あつ、兄貴！どうすんだよ！」

悪太郎、正面を睨んで考えている。

悪太郎「今すぐ高出力電磁パルスの発射は止めるんだ。行くぞ！」

と、手を大きく振って合図をする。

暴走族達、バイクを降りて、ケンタロウに突進する。

ケンタロウ、ショットガンを取り出して振り回す。暴走族、ショットガンで叩かれ地面に倒れていく。

○劇場

石飛、目を大きく開けている。

石飛「すげえ……強え……」

会社員、握り拳を作り手を上げる。

会社員「ケンタロウさんがあのサイボーグをぶちのめしたぞ！」

観客達、湧き上がる。

桃太郎、表情を硬直させて画面を見ている。

○画面・建物の出入口

暴走族達、さらに攻め込む。

ケンタロウ、ショットガンを振り回して暴走族達を倒していく。

悪太郎、ケンタロウにタックルをする。ケンタロウ、押し飛ばされ倒れる。

○劇場

観客達、どよめく。

桃太郎、会社員、メガネ、驚いた様に画面を見ている。

会社員「ダメだ！敵の数が多過ぎる」

メガネ「ケンタロウさん逃げてください！」

画面に映っているケンタロウ、建築物の前で倒れている。

ケンタロウ「駄目だ。奴らに高出力電磁パルスを止めさせるわけにはいかない」

と、立ち上がってショットガンを振り回す。暴走族達の攻撃を受けて倒れる。

メガネ「ケンタロウさん！」

殿森、格好をつけた表情で画面に手を向ける。

殿森「（低い声）へい！ケンタロウ！カムバック！」

と、両手で大きく手招きをする。

○画面・建物の出入口・外

ケンタロウ、立ち上がり、扉を開ける。
足を引きずって建築物の中に入る。

悪太郎の声「奴を逃がすな！」

と、暴走族、扉に突進して行く。

○画面・建物の通路

ケンタロウ、扉を閉め、鍵をかける。
外から扉が叩かれ、振動する。

○建物の出入口・外

暴走族達、扉を武器で叩いている。

悪太郎、その後ろに立っている。

悪太郎「早くぶっ壊せ！」

悪次郎、背後でバイクに乗ってエンジン
を吹かす。

悪次郎「兄貴、俺がやる！」

悪太郎「おまえら道を明ける！」

暴走族達、道を空ける。
悪次郎、扉に向かってバイクを急発進さ
せる。

○建物の通路

悪次郎、バイクに乗って、扉を突き破って入って来る。

ケンタロウ、ショットガンをフルスイングして、悪次郎を地面に転倒させる。

悪次郎、こん棒を片手に扉から入って来る。そのまま、悪次郎を踏みつけて進み、ケンタロウにタックルをする。

ケンタロウ、吹き飛ばされ倒れる。

悪次郎、持っているこん棒を振り上げケンタロウに襲いかかる。

ケンタロウ、ショットガンを悪次郎に向ける。

悪次郎、悔しそうに立ち止まる。

ケンタロウ、悪次郎にショットガンに向けたまま起き上がると、後ずさりするるように、司令室の開いた扉の方に向かう。

悪次郎「行かせるか！」

と、ケンタロウに突進する。

ケンタロウ、ショットガンの引き金を引いてBB弾を発射する。

悪太郎の顔に当たり、痛がって止まる。

ケンタロウ、その隙に司令室に入る。

○司令室

ケンタロウ、急いで扉を閉め、鍵を閉める。部屋の中央に行くと、地べたに座り込む。外から激しく扉が叩かれる。

○画面・建物の通路

悪太郎、指令室の扉にタツクルを繰り返す。

暴走族達、周囲でその姿を見ている。

○劇場

扉を叩く音が響いている。

メガネ、会社員、観客達、不安そうに画面を見ている。

桃太郎、険しい表情で画面を見ている。

メガネ「このままじゃ、あの扉も破壊されるんじゃない」

桃太郎「それは大丈夫です。重要施設の指令室を守る扉です。爆撃を受けても壊れる事はありません」

会社員、画面に一步近づく。

メガネ「ケンタロウさん！聞こえましたか？」
ケンタロウの声「ああ、聞こえたとも。これで、サイボーグは終わりだ」

観客達、嬉しそうにする。

石飛、安心する様に一息吐く。

榊崎、嬉しそうに石飛を見る。

榊崎「これでは後はカウントダウンを待つだけだね」

石飛「そうだね」

と、頷く。会社員、観客達の方を向く。

会社員「サイボーグが全て死滅したら、みんなで一杯やりましょう！」

観客達、盛り上がる。

メガネ「それ賛成です。ね、ケンタロウさん！」

ケンタロウ「残念だが、俺は参加できない」

会社員、画面の方へ振り返る。

会社員「まさか、お酒が飲めないとかですか？」

ケンタロウ「そうだ。俺が飲めるのは、エン

ジンオイルだけなんだ」

メガネ、会社員、観客達、考える様に

呆然と黙る。

会社員「エンジン……オイル……」

画面に映っている、指令室で座っているケンタロウ、ゆっくりと立ち上がる。

ケンタロウ「俺は∞年前、この崩壊した地上で目を覚ました。それ以前の記憶は何一つ無かった。だからこそ、自分の記憶を捜し求めて迷い続けていた。だが君達と共に行動して解った。∞年前、地上は崩壊していなかった。そう、俺の記憶は全て作られたものだったんだ」

メガネ「まさか……ケンタロウさんも……」
ケンタロウ「そうだ、俺は川村重工の博士達によって製造された、オイルを燃料とする

たった1台しかない、H7型の試作機だ」

観客達、どよめく。

会社員「じゃあ、高出力電磁パルスが発射されたら？」

と、桃太郎を見る。

桃太郎、悲しそうに頷く。

メガネ「ケンタロウさん、それなら今すぐ発射スイッチを止めてください」

ケンタロウ「それはできない。奴らをこの地上から完全に消滅させる事が俺の役割だ」

メガネ「そんな事ないです。僕達がいます！

僕は、ケンタロウさんと出会って、戦う事のできる男になりました。だから、別の方法で一緒に戦って奴らを倒しましょう！」

観客達E「そうだ！そうだ！俺達だって戦える。そうだよな！みんな！」

観客達F「ああ、その通りだ！」

観客G「そうだ。俺も戦うぜ！」

観客H「俺もだ！」

観客達、同意する様に盛り上がる。

殿森、リーダーの様に観客全員を見渡すと、目を瞑り、クスクスと笑いだす。博之、隅で落ち込む様に口を尖らせ下を向いて座っている。

石飛、不安そうにしている檜崎の肩に手を乗せ、顔を合せて頷く。

檜崎、少し遅れて、息を飲む様に頷く。

観客E「みんなで奴らと戦うぞー！」

目を瞑っている殿森、目を開けると、一步前に出て観客達を見る。

殿森「(低い大声)オーケーベイビー！」

メガネ、会社員、殿森の方を見てから、嬉しそうに顔を合せ、画面を見る。

会社員「聞こえましたかケンタロウさん！」

観客Q、慌てて劇場に入ってくる。

観客Q「大変だ！外に別の暴走族がやってきて、バリケードを物凄い勢いで破壊してる。それも、まだ見た事のない巨人みたいなサイボーグが何体もいるんだ！」

観客達、不安そうな表情を浮かべ、動

揺した声を上げだす。

ケンタロウ「おちつけ！もう奴らは終わりだ」
メガネ「でもそれだとケンタロウさんが……」
会社員「そうですよ。ケンタロウさんがいな
ければ、誰が僕達を？」

○画面・司令室

ケンタロウ、カメラ目線になり笑みを
浮かべる。

ケンタロウ「もうすでにいるじゃないか。次
の時代を背負う若き指導者が」

○劇場

画面には、ケンタロウがカメラ目線で
立っている姿が映っている。

メガネ、会社員、呆然としている。

メガネ「新しい……リーダー……」

ケンタロウ「俺を何度も窮地から救い、これ
からの闘いを勝利に導く若き男が」

格好をつけてポーズを決めている殿森、

ニヤリとしてから、呆然とした表情で
姿勢を変え、自分の手のひらを見る。

会社員「まさか……」

と、隅で口を尖らせて落ち込んで座っ
ている博之を見る。

博之の元に会社員、やって来る。

会社員「ケンタロウさんが君を呼んでいるよ」

博之、会社員を見上げる。

会社員、博之と画面の正面に歩いて来
る。

会社員「さあ」

と、腕でケンタロウが映る画面を示す。

博之「もしもし？」

ケンタロウ「あの時の君か」

博之「はっ、はい……」

ケンタロウ「君は俺と共に戦い、俺を何度も
救ってくれた。だからこそ今、超自然原理
主義から勝利を勝ち取れるんだ」

博之「うおー……」

ケンタロウ「君には並外れた実力と直感、危

機に対処する能力がある。俺がいなくなつた後、その力を生き残った人々の為に使ってくれ。皆が君の指示を待っている」

博之、驚いた様に呆然とする。

会社員「ケンタロウさんは、君を認めただ。

だから、君は僕達のリーダーだ」

観客達、博之を見て拍手をする。

博之、観客達を見渡す。

博之「うおー」

と、少しだけ嬉しそうにする。

おぼさんの声「エネルギー補充完了。超高出

力電磁パルスを発射します」

観客達、動揺する。

メガネ「ケツ、ケンタロウさん……」

会社員、握り拳を作り下を向く。

桃太郎、目をつむる。観客達、ざわめく。

ケンタロウ「後の事は任せたぞ」

と、タレ目のサングラスを外す。細すぎるタレ目を出し、カメラ目線で笑み

を浮かべる。

画面をじっと見ている殿森、姿勢を整え、素早く敬礼をする。

ケンタロウ「さらばだ、友よ」

次の瞬間、全ての電気が消え暗くなる。

補助電源が入り、薄暗い照明が場内を照らす。静まり返る室内。

メガネ、肩を落としている。

桃太郎、目を瞑って下を向いている。頭に斧が刺さっている静江、心地良く眠る様に上向きに倒れている。

涙を流している会社員、隣の博之の方を見ると、何かを発見したような表情になる。

博之、タレ目のサングラスをかけ、下唇で上唇を隠すように口元を引き締め、決心したような表情で画面を見ている。

殿森、背を向けて、出口にゆっくりと歩いて行く。扉の前で立ち止まり、画

面の方へと振り返る。

殿森「(低い声)アスタラビスタベイビー」

と、背を向け、扉の外に出て行く。

○映画観の外(夜)

月明かりに照らし出されている。

殿森、伊田、呆然と遠くを見て立っている。

足元に丸い情報端末が落ちている。

殿森「これいつ終るんや？もう夜やで」

伊田「……」

殿森「アメリカのドッキリ番組って、こんなターゲットを待たすんか？」

伊田「もしかして、アメリカもテレビも関係なくて、全部現実だったりして」

殿森、小型情報収集端末を拾う。

殿森「もしかして、俺の勘違い？」

伊田、生唾を飲む。

伊田「そうかも」

殿森、遠くを見る。

殿森「確かに、ドッキリ番組なら、もう野中
がドッキリって書かれたプラカードを持
って出て来てるはずやもんな」

伊田「……」

殿森「もしかするとこの展開、実は全部現実
やったってオチちゃうやろうな……」

伊田「車を買う為にお金貯めてたのに……」

殿森「いや、車やったらそこにケンタロウの
あるからもらえばいいやん。もうおらんし」

伊田「ああ……そうだね……」

殿森「で、どうしよ。これ、ちよつとまずい
状態やで……」

と、呆然と周囲を見渡す。